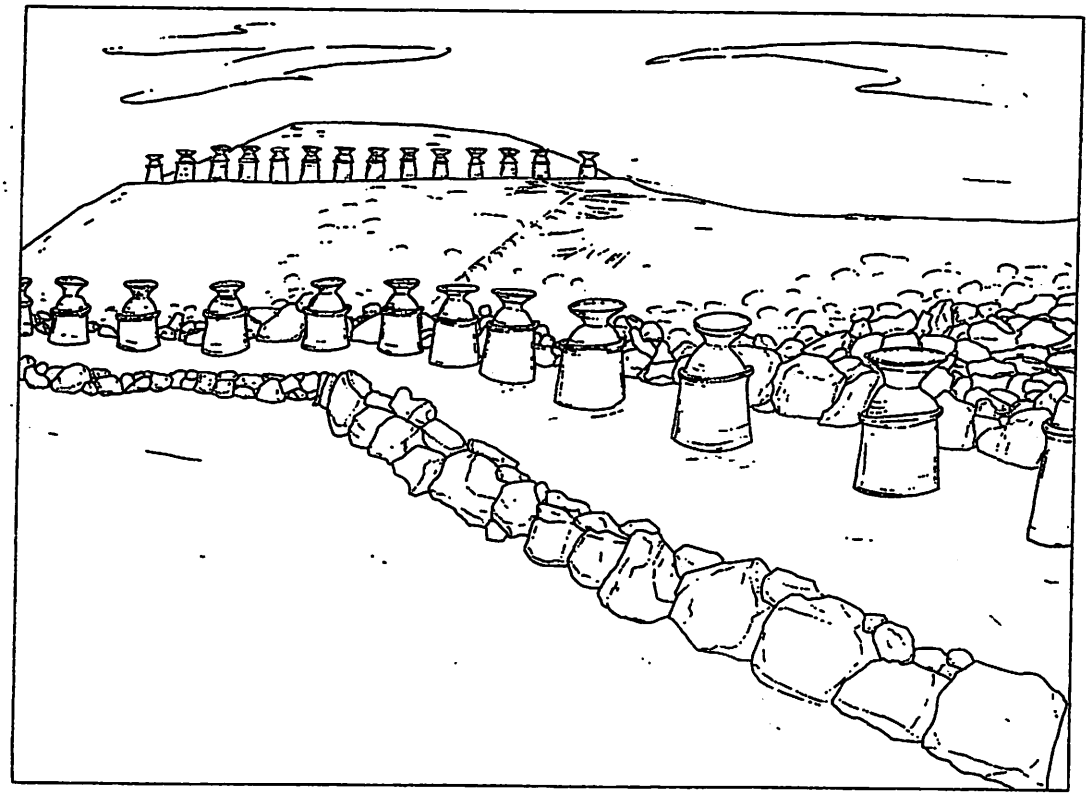
2008年度長尾山古墳発掘調査現地説明会資料

２００８年９月23日
宝塚市教育委員会・大阪大学考古学研究室



【西クビレ部調査区の成果に基づく長尾山古墳築造当初の姿】

はじめに

宝塚市教育委員会と大阪大学考古学研究室は共同で昨年度に引き続き、８月 27 日より同市山手台東１丁目に所在する長尾山古墳の発掘調査を開始しました。その結果、古墳の形、規模、墳丘構造を確定することができました。また、摂津地域(兵庫県南東部～大阪府北部)では最古の埴輪列（古墳に立て並べられた状態の埴輪）が良好な状態で検出されました。

１　調査の概要

現地住所：兵庫県宝塚市山手台東１丁目４－４２４(図１)
調査主体：宝塚市教育委員会・大阪大学考古学研究室
調査方法：墳丘および墳頂部の平面発掘調査(図２参照、５カ所、合計 65 ㎡)
調査期間：2008 年８月 27 日～９月 27 日(予定)

2　主な調査の成果

① 猪名川流域で最古の前方後円墳（古墳時代前期前半＝４世紀初頭）と確定。

② 摂津地域で最古の埴輪列（朝顔形埴輪）を良い状態で検出。

③ 墳丘規模と構造を解明。墳丘長 39 mの前方後円墳で、前方部二段、後円部三段築成。

④ 墳頂部に埋葬施設の墓壙と考えられる土層の違いを確認。

⑤ 長尾山古墳は小規模ではあるが、前方後円形、葺石、埴輪、段築成などの要素は、大和の初期古墳と共通。

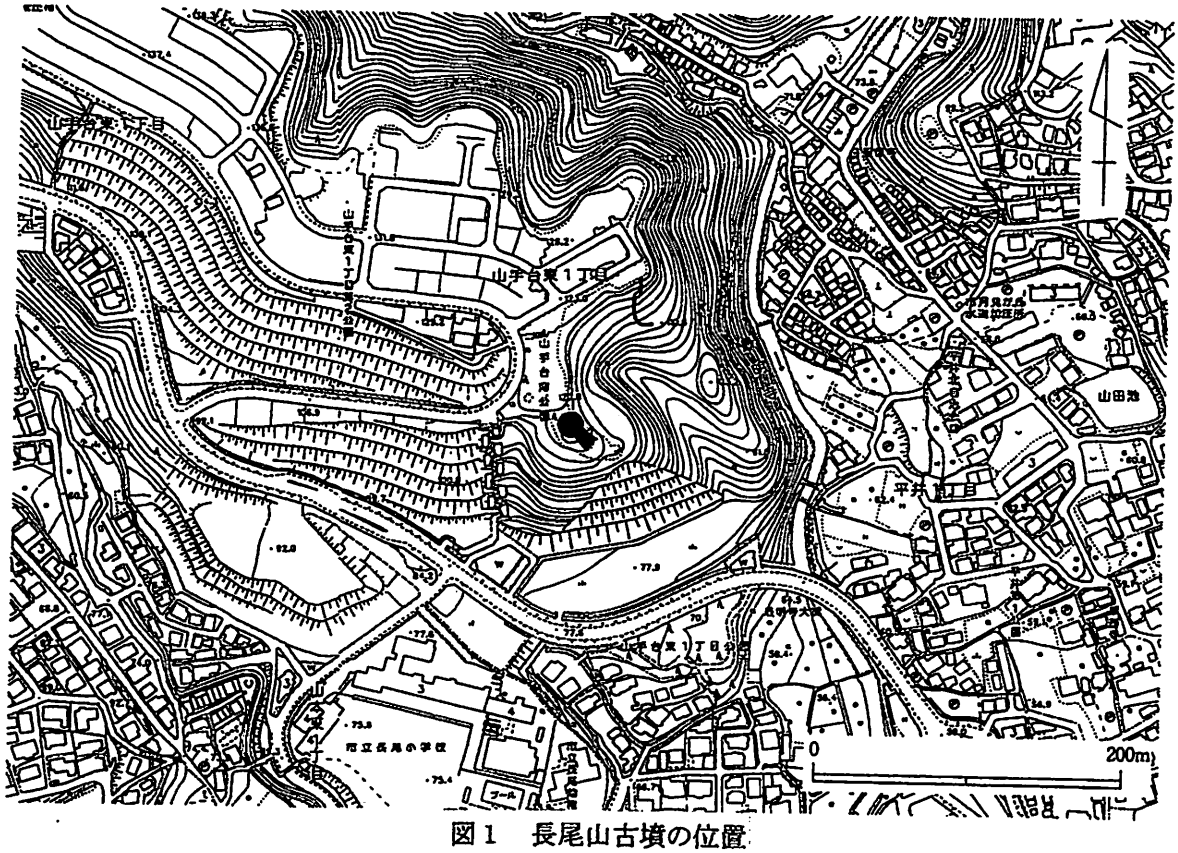


図１　長尾山古墳の位置

3　調査に至る経過

長尾山古墳は 1969 ～ 1970 年に宝塚市教育委員会・夙川学院短期大学日本歴史研究会による測量調査により、長さ 36 mの前方後方墳であると推定されました。ただし、その後は調査が実施されることはなく、猪名川流域（兵庫県南東部～大阪府北西部：豊中市・池田市・箕面市・川西市・宝塚市・猪名川町・伊丹市・尼崎市）の首長墓系譜（各地域ごとの首長の盛衰）を考えるうえで重要な古墳であるにもかかわらず、墳丘形態や築造時期については不明な点が多く残されていました。

そこで、大阪大学では宝塚市教育委員会の協力を得て 2007 年８～９月にかけて、長尾山古墳の測量および初めての発掘調査を行いました。その結果、この古墳が前方後円墳である可能性が高く、出土埴輪からみて、これまで考えられてきた 4 世紀末～５世紀初頭（古墳時代前期末～中期初頭）のものではなく、4 世紀初頭（古墳時代前期前半）にさかのぼる、猪名川流域では最古の古墳であるとの暫定的な成果を得ました。これを受けて、今年度は宝塚市教育委員会と大阪大学考古学研究室の両者が共同で調査主体となり、古墳の形態、時期、墳丘の構造、埋葬施設の残存状況をさらにはっきりさせるために、発掘調査を実施することになりました。

（寺前直人）

4　調査成果

(1)トレンチ配置(図2)

今年度の調査では5箇所に調査区を設けています。昨年度に引き続き、前方部の構造を明らかにするために前方部墳端に1箇所（前方部トレンチ）、くびれ部の検出のために西側のくびれ部に1箇所（西クビレ部調査区）の調査区を設定しています。また今年度の調査で新しく、墳丘東側の様相を確認するために2箇所（東クビレ部第1・2トレンチ）、後円部墳頂にも埋葬施設の残存状況を確認するために1箇所（後円部調査区）の調査区を設けています。

（前田俊雄）

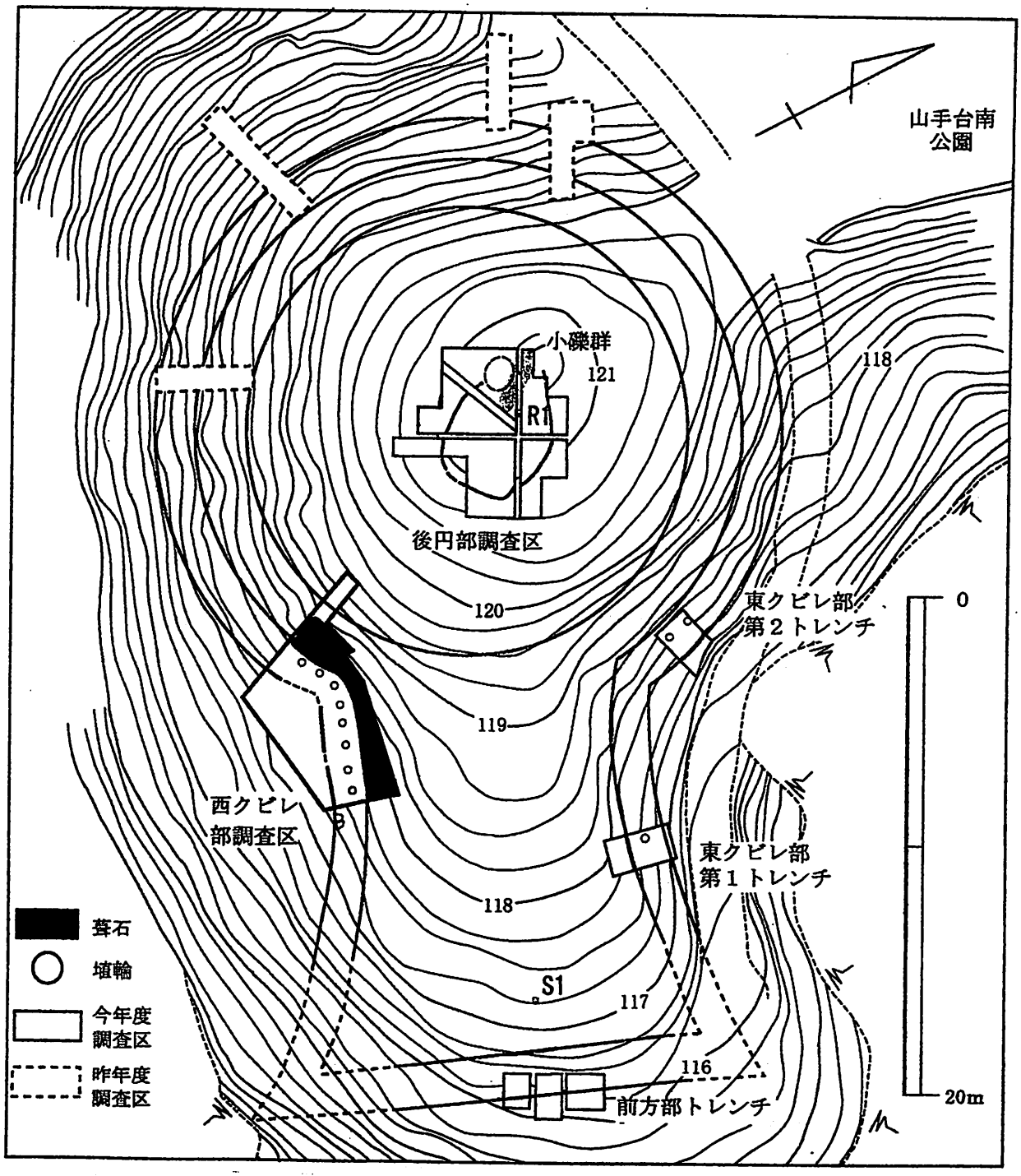


図2　葺石・埴輪の検出位置と墳丘復元案（S=1/250）

(2)各調査地点の成果(図2)

①東クビレ部第1トレンチ

葺石列とその下に設けられたテラス面を検出しました。このテラス面では、底の部分を含む埴輪片が確認されており、これが樹立された埴輪の名残である可能性があります。この葺石は標高と位置から見て、前方部二段目の基底石列にあたると考えられます。基底石には人頭大の大きな石材が使われています。　(森　暢郎)

②東クビレ部第2トレンチ

ここでは葺石列とその上に設けられたテラス面を検出しました。このテラス面では2本の埴輪の底の部分が立ったままの状態で確認されています。葺石と埴輪の標高や位置から見て、この葺石は後円部一段目の基底部の葺石にあたると考えられます。　(森)

③西クビレ部調査区

昨年度、前方部が検出された西クビレ第1トレンチと後円部が検出された西クビレ第2トレンチの間をつなげるように掘削を行いました。その結果、前方部と後円部が接するクビレ部分の葺石と「く」字状に並ぶ6本の埴輪底部が新たにみつかり、去年みつかったものとあわせるとこの部分には8本の埴輪が並んでいたことが判明しました。となりあう埴輪の中心間の距離は1.0m前後となっています。

葺石二段目は基底石がほぼ当時の様子をとどめた形で残っていましたが、一段目の残存状態は悪く、基底石が失われてしまっている部分も目立ちます。また、二段目より上の墳丘の様子を知るための後円部側に2mほど拡張しましたが、葺石や古墳完成時の面は流失していました。ただし、古墳を造る時に地山を削りだして平坦にした部分が観察でき、その付近に2段目のテラス面があったのではないかと考えられます。そうすると、後円部は三段に築成されていた可能性が高くなります。　(野島智実)

④前方部トレンチ

前方部トレンチでは、前方部の前端に1～2段に積まれた葺石列を約4mにわたって検出しました。南西側の基底石と北東側の基底石とは約30cmの高さの違いがあり、長尾山古墳の前方部では葺石底部が地形に沿って傾斜して葺かれていたようです。(酒井将史)

⑤後円部調査区

調査区中央部に土質の異なる部分を検出しました。この遺構は現時点では墓壙の可能性を考えています。また、小礫を含む南北方向の浅いくぼみも見つかっており、「棺」が朽ちたために土が落ち込んだ「陥没坑」の可能性があります。調査区の北西部では、他とは異なる小礫を多く含むやわらかい土が検出され、盗掘坑の可能性も考慮しなければなりません。このように墳頂調査区では様々な土質の違いが認められましたが、その性格や埋葬施設の現状を確定するためには、今後さらに掘り広げて検討する必要があります。来年度以降の課題です。　(中久保辰夫)

(3)遺物(図3)

昨年度に続き多くの埴輪が出土しています。口の部分が屈曲して上方に開く「二重口縁」の破片が多数認められます(1、2)。また、初期の朝顔形埴輪(図5)の特徴を残す受け口状に屈曲した口縁部の破片も見つかっています(3)。朝顔形埴輪の頸部と思われるものも出土しています(4)。ただし、器形や器面の調整方法は多様で、今のところ一定の規格をみいだすことはできていません。突帯もいくつかの形のものがあり、なかでも特徴的な受口状のものが昨年度に続き多数出土しています(5)。このような成果を踏まえ、長尾山古墳

の埴輪の全体像を考えてみたものが図４です。受口状突帯より上の形はおおよそ想定できますが、透孔の形や突帯の間の長さがわからないため、詳細な全体像の復元は今後の課題です。

（金澤雄太）

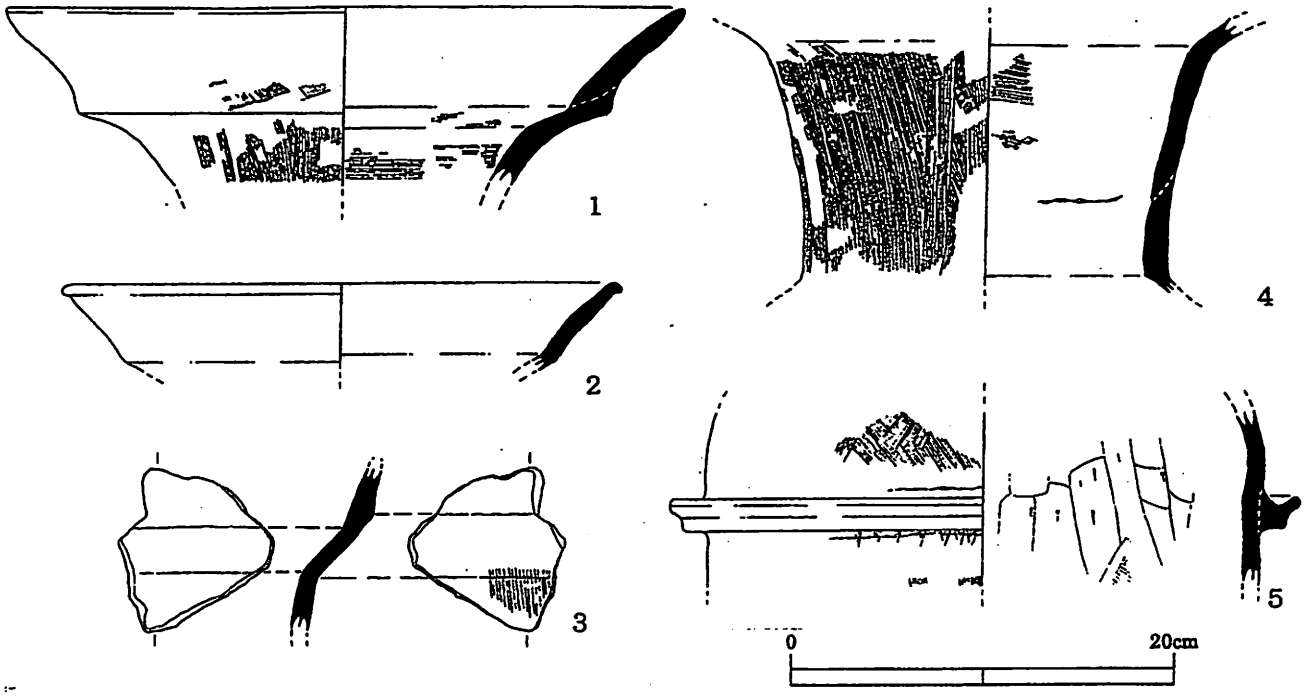


図３　長尾山古墳出土埴輪（S＝1/4）　　１．東クビレ部第１トレンチ　２～５．西クビレ部調査区

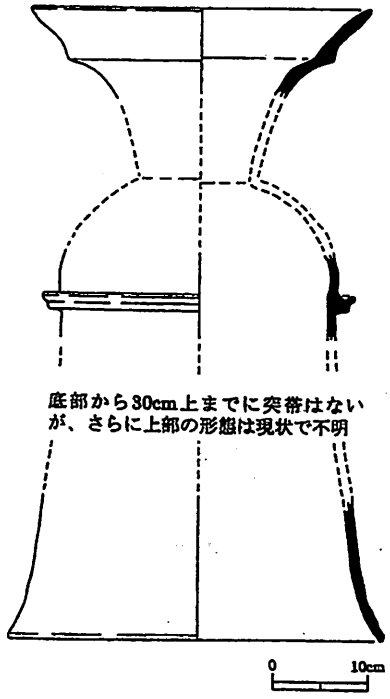


図４　朝顔形埴輪復元図（S＝1/8）

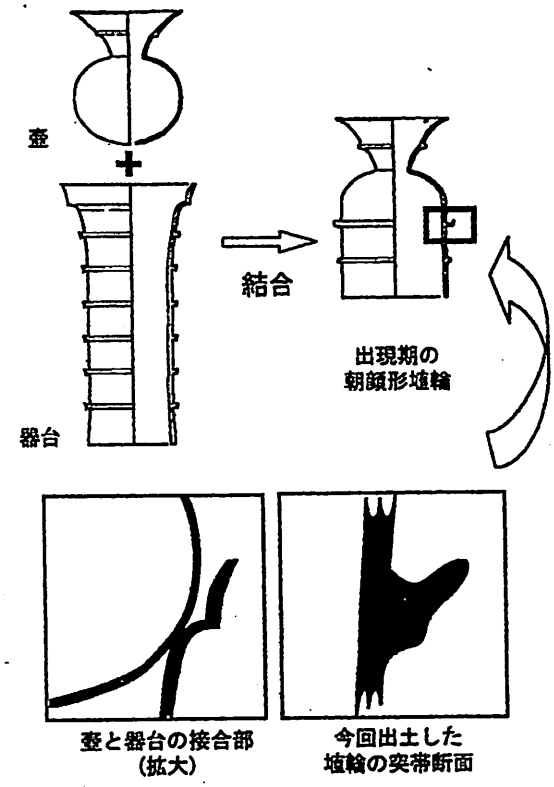


図５　朝顔形埴輪の成立過程

5　調査成果のまとめと意義

今回の調査成果をまとめると以下のようになります。

① 猪名川流域で最古の前方後円墳（古墳時代前期前半＝４世紀初頭）と確定。西クビレ部調査区で葺石基底石と埴輪列を良好に検出したほか、各トレンチで葺石や樹立埴輪を確認した結果、前方後円墳であることが最終的に確定。

② 摂津地域で最古の埴輪列（朝顔形埴輪）を良い状態で検出。長尾山古墳の埴輪は壺を器台にのせた形をかたどった朝顔形埴輪と呼ばれるもの。受け口状の器台口縁部の屈曲を良く残しており朝顔形埴輪の最古段階のもの。類似する朝顔形埴輪は奈良県天理市東殿塚古墳（前方後円墳/墳長175m/４世紀初）、大阪府柏原市玉手山３号墳（前方後円墳/墳長95m/４世紀初）など、畿内の有力前方後円墳でわずかに見つかっているだけの古い形。埴輪が当時のままの状態で列状に並んで検出された例としては、摂津地域では最古例。

③ 墳丘規模と構造を解明。墳丘長 39 mの前方後円墳で、前方部二段、後円部三段築成。前方部前端の葺石列がとらえられたことにより、墳丘長 39 mと確定。前方部二段、後円部三段という段築構造は、畿内の有力前期古墳の典型的なスタイル。小規模古墳ながらもそれを採用していることは、被葬者の大和政権主流派としての立場を示していると推定。

④ 墳頂部に埋葬施設の墓壙と考えられる土層の違いを確認。埋葬施設が残っている可能性が高いが、来年度以降の継続調査とする。

⑤ 長尾山古墳は小規模ではあるが、前方後円形、葺石、埴輪、段築成などの要素は、大和の初期古墳と共通。猪名川流域で最初に大和政権と同盟関係を結んだ首長の古墳は、最新のスタイルをいち早く受け入れていたことがさらに明瞭になり、西摂古墳時代政治史のはじまりが確実にとらえられるようになった。

昨年度の調査で前方後円墳の可能性を指摘した長尾山古墳ですが、限られたトレンチ（筋掘り）の調査であり、なお推定の部分が多くありました。今回の調査によって西クビレ部、東クビレ部、前方部前端ではっきりとした墳丘の情報が得られたことにより、長尾山古墳が、猪名川流域では最古の前方後円墳であり、葺石と摂津最古相の埴輪をそなえていることが確定しました。また、前方部二段、後円部三段の段築成の構造も、畿内の古い有力古墳の典型的なスタイルです。このように、小規模ながらも長尾山古墳が政権中枢の古墳づくりと共通する特徴を持っていることは、その被葬者が初期大和政権の葬送儀礼をいち早く採用したことを意味しており、政権と猪名川流域との連携が長尾山古墳被葬者の活動をきっかけに４世紀初めには早くも成立していたことになります。文献にはあらわれない猪名川流域の古墳時代史の第１ページが明らかになったといえます。

しかしながら、墳丘については前方部の開き具合や後円部三段目の構造、埋葬施設についてはその構造や数、盗掘の有無など、まだ未解決の課題がいくつもあります。今後も長尾山古墳の実態の解明につとめ、地域の文化財として活用できるように取り組んでいきたいと考えています。

（福永伸哉）

調査成果速報のＨＰ　http://www.let.osaka-u.ac.jp/kouko/hpNagaoyama2008/index.htm